# 綾羅木郷遺跡の開発と保存

## 綾羅木郷遺跡と周辺の地理的環境

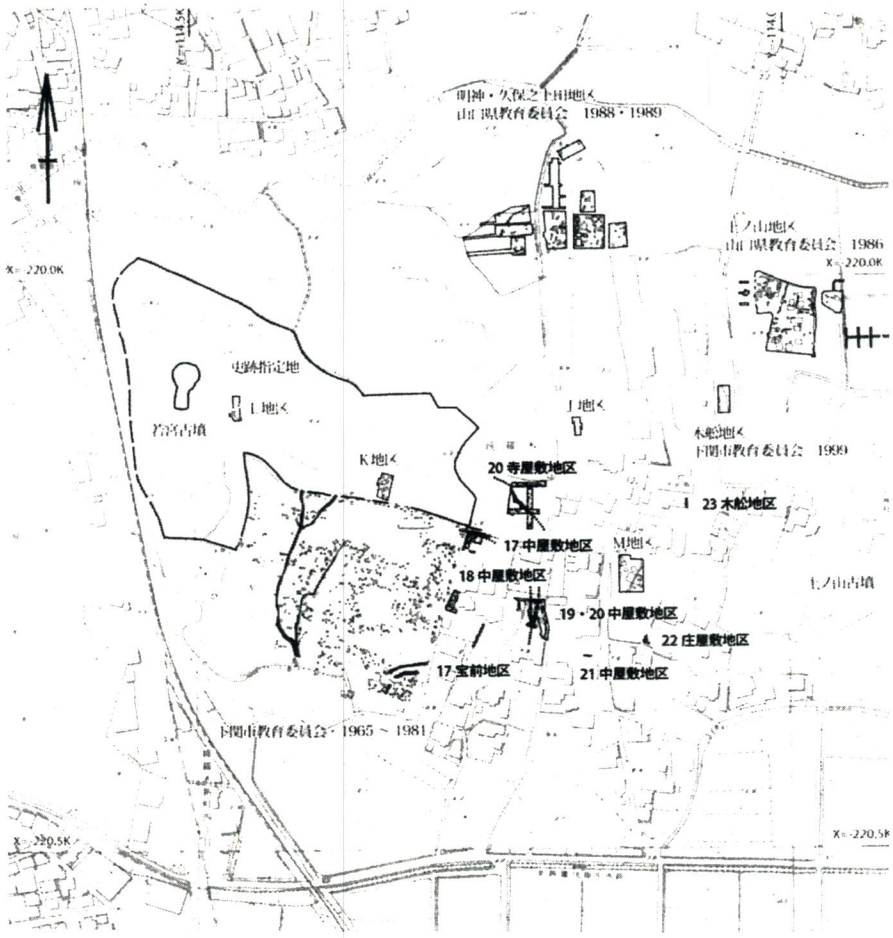
本州最西端に近い下関市綾羅木は、縄文時代晩期頃から始まった海退期に、内陸に入り込んでいた湾の中に、綾羅木川の上流から運ばれた肥沃な土壌の堆積によって、しだいに低地が拡大し、標高5mあたりに集落が営まれた。一方、縄文時代の海進期に堆積した2条の砂丘と、その後の堆積による砂丘は、現在の海岸線を弧状に形成している。

綾羅木郷（台地）遺跡は、綾羅木川下流の北側に、ほぼ東西に延びる丘陵の先端に位置している。遺跡の西端は、大正2年（1913）にＪＲ山陰本線（旧 長州鉄道）の敷設工事で削り取られており、遺跡はさらに海岸に向かって伸びていたと考えられる。遺跡の両端は馬蹄形を呈するように北へ延び、標高約 16mを測る西端には、南北方向に長軸を置いた前方後円墳である若宮1号墳と小古墳が点在している。西端から東へ傾斜して低くなる一帯は蔬菜（そさい）畑として耕作され、東端に集落がある。

## 綾羅木郷遺跡の概要

綾羅木郷（台地）遺跡は弥生時代前期中頃から中期初頭の比較的短い期間に営まれた遺跡で、遺跡の範囲も明確ではない。特に、遺跡の東側では谷状地形をはさんでさらに貯蔵用竪穴が確認されており、遺跡の東限が確定できない。さらに、この遺跡で不明な点は、これほどまでに多数の貯蔵用竪穴が作られているのに同時期の住居跡が 1 棟も検出されていないことである。その理由として、本来、貯蔵用竪穴の周囲に住居があったが耕作によって削平されたとする考え、東に隣接する場所に住居が営まれていたと考え、隣接する複数の小集落の共同の貯蔵施設であったとする考えなどがあるが、いずれも根拠に乏しい。

遺跡からは貯蔵用竪穴が多数発見され、調査によって確認されたもので1,000基を超え、未調査のものを加えると、その数は1.5倍とも2倍とも考えられる。その断面形状の多くは上部が狭く下部が広い逆台形を呈し、ほとんどが台地を覆う赤土層を掘削し、底が硅砂層に達するものもある。硬い赤土は壁の崩落を防ぎ、硅砂層は水はけがよいので竪穴内の乾燥を維持する。底面積は2.5～3.0




綾羅木郷（台地）遺跡の発掘調査実績

㎡のものが多いが、大型のものでは6㎡を超え、深さは上部が削平されている場合が多いが3m以上の例もある。

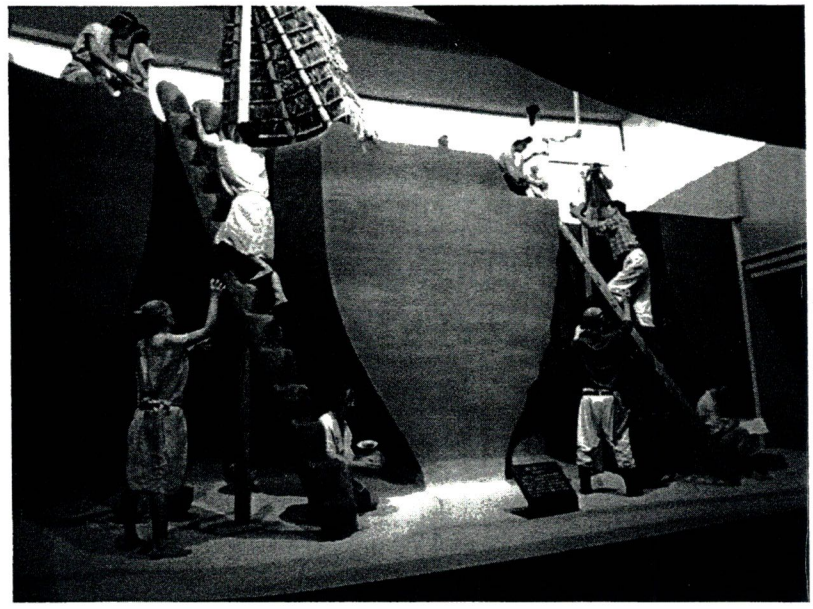
貯蔵用竪穴は前期前半のものは概して小型で、上部が方形を呈する。それ以降は比較的大型になり、上部も丸く低面に柱穴を穿ったものが多くなる。もともとは木板で蓋をしていたものが、柱を持つ草葺きの掩蓋(おおいぶた)を設けるようになったと考えられる。内部には、おもに土器に籾などの食料を入れて蓄えたとみられるが、クジラの肋骨など道具に加工したと思われるものも発見されている。また、幼児の墓に転用された例や土器焼成に利用したとみられる竪穴もある。

貯蔵用竪穴を取り囲む環濠は、幅が2m以上、断面がV字形で、深さは3mにも及ぶ場所も確認されている。環濠は分岐するものや並行するものもあってその全容は不明である。検出された環濠は大きくは2〜3条が巡らされているようにもみえるが、一時期に掘られていたわけではなく時期が新しくなるにつれて外側に掘り直されていったものと思われる。

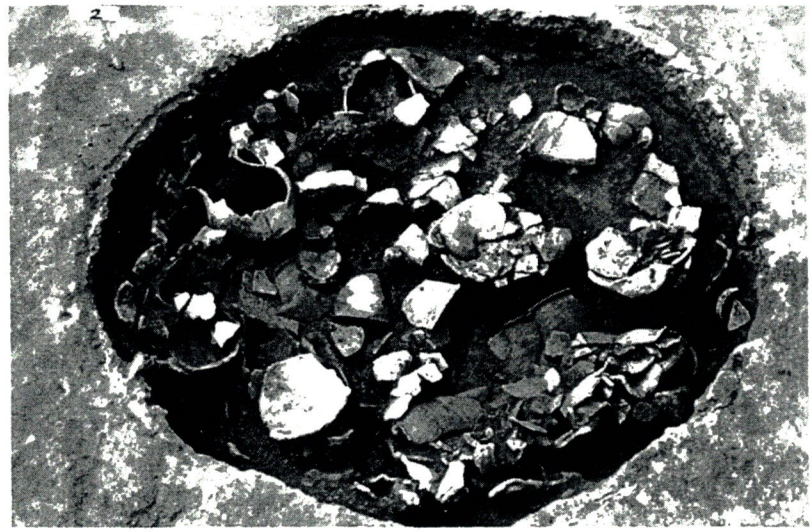
出土した遺物には、土器や土製品、石器などの石製品、獣骨や角、魚骨、鉄製品がある。中でも、陶塤(とうけん)と呼ばれる卵形の土笛は、日本で初めての発見であった。

土器は前期から中期初頭の形式におよぶ。前期は綾羅木Ⅰ〜Ⅲ式、中期は綾羅木Ⅳ式に細分されるが、中でも壺の比率が高い。また、手づくね土器や朝鮮系無文土器を模倣した鉢、カラムシの繊維が付着した壺などもある。

※ 以上、本文は東京国立博物館特別講演会「山口県綾羅木郷遺跡の保存と活用 ー弥生時代前期における歴史的意義を巡ってー」(2013年12月)を引用



貯蔵用竪穴のジオラマ



FⅡ地区の貯蔵穴 (Pit2)

GⅡ地区の環濠調査状況

## 硅砂（けいしゃ）の採掘

綾羅木郷（台地）遺跡は、すでに明治30年代に弥生土器や石斧の発見によって、その存在が知られていた。だが、下関は重要な要塞地帯として軍事施設が建設され、厳しい制約のもとに置かれていたため、調査はおろか市内の詳細な情報を記録することもできなかった。人々が自由に行動できるようになったのは戦後になってのことである。

その後、昭和24年（1949）、小字寺屋敷で多量の弥生土器片が発見された。その後、昭和31年（1956）、初めて発掘調査が行われ、昭和40年（1965）には本格的な遺跡の発掘調査が実施された。しかし、時代は日本の高度経済成長期で、全国的に開発と遺跡保存とのせめぎあいが繰り広げられていた。

郷台地では、昔から地域の人々が畑に作物を植え、その収穫を生活の糧としてきた。表層は赤土で覆われているものの、夏季の干ばつで畑の生産性は低いものであった。この土地の地下から硅砂を掘り取って土地を低く造成すれば、水持ちも良くなり耕作しやすくなる。こう考える地権者の思惑は当然のことであった。

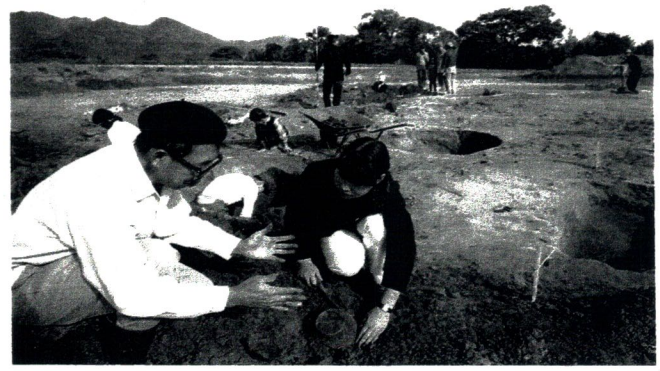
戦後、自動車エンジンの部品の鋳型製作に用いられる硅砂が、ベトナム戦争によるカムラン湾の封鎖で、南ベトナム産の輸入が止まった。国内に供給先を求めざるを得なくなった結果、北浦地域の海岸沿いに良質な硅砂が包蔵されることから、郷台地でも工業用硅砂の採掘が始まったのである。

穏やかであった郷台地に暗雲が立ちこみ始めたのはこのころからである。

遺構の検出と畑の耕作

硅砂の採掘

市民ぐるみの発掘状況



学生に説明する国分直一氏